火花
NO18
1968・1・8
共産主義者同盟関西地方委員会発行

共産主義者同盟関西地方委会をどのように強化するのか？

一九六八年一月八日、田原芳、

㊙

《はじめに》

同盟員諸君！並びに、活動家諸君、現在、日本の階級斗争と、我が同盟は、次の極めて重要な問題点に当面している。それは、一方で、マルクス・レーニン主義の基本的な原則であるプロレタリア国際主義と、プロレタリア独裁（暴力革命）が、世界の資本主義の現実の前で、又、この資本主義と斗うプロレタリアートの斗いとの関係で、絶望したり、「原則は原則でしかすぎない」として、現実の個々の斗争の方がもっと大切だといった考えが、どうしても日常の実践活動に頭がいっぱいになってしまうということである。他方では、国際主義とプロレタリア独裁が、今すぐにでも実現出来る（実現しようとする考え）と思いこむ誤りに落いることである。

これらの二つの誤った傾向を克服し、我が同盟をきたえあげることが要求されているのである。ところで、プロレタリア国際主義と、プロレタリア獲裁とは、決して矛盾するものではなく、帝国主義列強を打倒するためには、この二つの原則は、不可欠のものであることを理解しなければならない。現代の革命は、各国の孤立した革命としてではなく、全世界が唯一つに結びついた革命として斗われるのであり、共産主義者は、常にここから、革命のための準備を押し進めなければならないのである。

圣験主義的な考え、今すぐに絶対的な回答をもとめようとするような、小ブル的な、あわてものにとっては、世界革命のための偉大な任務のために、不屈の努力を傾けることは、無意味なものに思えるかもしれない、しかし、我が同盟員は、我々の力量の小ささからくる、この目的、任務と現実とのギャップ、断層にのみこまれてはならない。そして、我々の目的の実現のために、着実に現実の諸条件の中で、不断に準備をととのえてゆかねばならないのである。

（一）

最近、急速に、我が同盟の内部に於いて、二つの論争がおこりはじめた、この論争は、ある時は意識されたり、意識されなかったりしている。然し、この論争は極めて重要なことである。この論争というのは、一つには、帝国主義世界と世界革命に関するものである。

Ⓐ この論争は、帝国主義列強とプロレタリアート、帝国主義と、社会主義、帝国主義と植民地、又、社会主義と植民地の相互の関係を我々がどのように理解すればよいのか、又、この相互の関係をとおして、プロレタリアートを世界革命に導くにはどうすればよいかということがとわれているのである。

Ⓑ、二つめの論争というのは、我々が、「烽火」NO5において検討しておいたように、党と戦斗組織の関係についてである。この問題は、当面する諸斗争の戦術と党建設に関する問題である。

我々は、この二つの論争に目的意識的にとりくんでゆかねばならない。

一つめの論争については、「烽火」NO6においてとりあげ、又今後もにつめてゆかねばならないものである。ここでは、特に、二つめの問題についてのべることにしよう。

（二）

現在、関西地方委員会が当面している組織上の最も重要な問題というのは、党の基本組織である細胞、地区委員会、都道府県委員会、中央組織と、全学連グループ、反戦グループ、労研・社研グループといった、諸組織に於けるグループとの関係についてである。我が同盟は、全学連グループから生まれて来たが、このグループ活動を、急速に党の基本組織に一方で切りかえてゆく必要性が生まれて来ている。

一方に於ける地区党の建設を、他方、各グループ活動の強化を同盟に強化することが今、関西地方委員会に要求されている。

我が同盟は、全同盟員を明確に所属を決める必要がある。所属は、次の三つで行う。

① 党我関所属、② 各地区委員会所属、③ 圣営又は、住区細胞所属、

今後、わが同盟は、この三つの機関を通じて基本的な指導を行う。又これとは別個に、次の三つのグループ指導を行うことにする。

①、産別グループ（産別委員会）

②、反戦グループ、（反戦青年委員会グループ）

③ 全学連グループ（学対）

Ⓐ党組織（基本組織）は、①、中央機関紙誌（戦旗、共産主義・プロレタリア通信、②、烽火、火花をとおして行う。

Ⓑ、産別グループ（産別委員会）は、機関誌「BUND」で指導する。（4月）

Ⓒ 反戦グループは「反戦」（仮称）で指導する。（4月）

Ⓓ、全学連グループ（学対）は「戦士」又は「先駆」又は「理論戦線」又は「評論」でおこなう。

党の各級機関又は細胞は、CAP、副CAP、書記長、財政、機関紙担当をおく必要がある。

（二）

現在の我が同盟の機関紙誌及び、党上納費の回収状況は、全体の½ぐらいである。これでは、えらそうに、革命の話をどもってのほかだ、特に、学生同盟員は、全国斗争のために、党費や、機関紙誌の上納がきわめてわるい状況にある。この状況を克服しなければならない。同盟を党としてきたえあげるためには、このことは不可欠の条件である。

各グループ活動から、党活動にその中心を大きく転換しなければならない。

党活動を強化し、党の影響力を広げねばならない。各グループ活動は、この党活動と結びつくことなくしては決して、飛躍的な拡大を実現することは出来ないのである。

10、さと、11・12斗争を境として、「烽火No5で書いてあるように、一方に於ける戦斗組織の強化と、他方では戦斗組織の克服が要求されはじめている。

ところで、この戦斗組織と言うのは、資本主義の危機が深まり、失業者がふえたり、資本主義の機能がまひするまでは、大かたは、一方で職をもち、一日のうちの何時間か、一ケ月のうちの何日かを、政治斗争にささげて集まった人々が、一時的に、街頭行動において、準軍事的な行為や組織をつくりあげようとするものであると同時に、既在の諸大衆組織を、このような、行動団体、戦斗組織にきりかえようとするところに生まれるものである。

我が同盟に於いても、このような可能性を十分に持った全学連、自治会に、グループを構成し、又、一昨年からは、反戦青年委員会の中にグループをつくりあげることによって、又、職場及び産別の中に、労研や社研や、…守る会といった産別、地域グループを構成することによって一貫とした戦斗組織の強化のための努力をつみかさねて来たのである。然し、これらの組織は、資本主義との関係（特に、権力との関係）と、又、労働組合をはじめとした諸大衆団体との関係からみるならば、純粋の戦斗組織へ（軍隊）とははるかにことなるものであるし、それらの活動の多くはより広い意味での政治活動（教育や宣伝）の領域を構成していると言わねばならない。

これらの準、準軍事行為や組織と言うものは、多ければ多いものであるし、強ければ強いほどよいことである。然し、こうした行為や、組織に、党の全政治活動を従属させようとする考えは、しょせんは、大衆運動主義であり、解党主義にほかならない。

党の活動というのは、これらの戦斗行為や、戦斗組織を強化し、拡大するためにも、この資本主義と、全面的に、構造的に斗う必要があるのである。そのためには、全同盟員は、各グループ活動に系統的に所属するためにも、党機関、又は、地区、細胞に所属しなければならないし、この党の任務の一貫として、各グループ活動にも参加してゆかねばならないのである。

我々は、細胞を、主要な産業や地域につくりあげてゆかねばならない。特に、国鉄、全逓、電通、教組、自治労、鉄、機械、金属、化学、繊維、の中に、細胞を建設してゆかねばならない。これらの中に、細胞を、産別グループを、反戦グループを組織してゆかねばならないのである。そして、これらの主要産業に於ける活動を助け、又、これらの活動を倍加するような宣伝活動を強化しなければならない。一冊のパンフレットが、十人のオルガナイザーになるような、すばらしい宣伝活動を行なわなければならない。